The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文学研究科共同研究「中近世日朝交流史の学際的研究」活動報告
Author(s)	小野, 潤子; 康, 盛国; 伊川, 健二 他
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2011, 45, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文学研究科共同研究
「中近世日朝交流史の学際的研究」活動報告

伊川　健二・合山　林太郎・小野　潤子・康　盛国

キーワード：対馬，李学逵，草梁倭館，雨森芳洲，釜山

はじめに

本研究は、日本文学ならびに共生文明論の 2 コースの協業によって、中世後期から近世期までの日朝関係に関わる事柄を、共同で調査・研究し、議論することを目的とした。同時に、本学における当該研究の活性化及び基盤づくりを目指し、平成 22 年度大阪大学文学研究科共同研究として、7 月 19 日に申請し、7 月 22 日に採択された。同研究科研究推進室へは、平成 23 年 5 月 6 日に研究成果報告書を提出しているが[1)]、より詳細な情報の共有をはかるため、本稿の執筆についてメンバー全員の合意を得た。

決算は次のとおりであり、具体的な活動は下記（A）～（C）である。

費目	内容	小計
設備備品費	書籍代（11 冊）	46,259
消耗品費	文献複写代金（53,580）、文具代（7,341）	60,921
旅費	対馬踏査× 4 名（310,440）、東京文献調査（31,100）× 2 名、金沢文献調査（16,120）× 1 名	388,760
謝金		0
その他	複写国際送料（ソウル→大阪）	4,060
計		500,000

（A）対馬におけるフィールドワーク

本研究における最初の活動として、9 月 19 ～ 22 日にかけて実施された。19 ～ 20 日は厳原の、21 ～ 22 日は上対馬の調査を行った。詳細は、下記

第 1 章「対馬現地調査」のとおりである。

(B) 研究セミナー、及び『洛下生集』の輪読会

李学逵「草梁倭館詞」の輪読を中心とし、適宜背景に関する研究史などの情報収集を行った。文学研究科本館日本文学 444 教室において、11 月 29 日、12 月 23 日、2 月 1 日、2 月 17 日、3 月 29 日の計 5 回開かれた。「草梁倭館詞」および、この活動により得られた認識、情報の詳細については、第 2 章「李学逵『草梁倭館詞』の世界」および第 3 章「『草梁倭館詞』の可能性―漢文学研究の側から―」のとおりである。

(C) 個別資料調査

以上の研究グループ全体での活動に加え、小野、康、合山が個別に資料調査を行った。その内容および成果は次のとおりである。小野は、11 月 11 日～ 13 日に、東京大学史料編纂所で対馬の古文書などを調査し、対馬藩の菩提寺である養玉院如来寺を訪問、歴代藩主肖像画の様相を確認した。また、1 月 14 日に、国際日本文化研究センターにおいて対馬宗家文書のマイクロフィルムにより、文化度朝鮮通信使の釜山滞在前後の日記を複写した。康は、1 月 14 ～ 15 日に、国立国会図書館、国立公文書館、国文学研究資料館で、朝鮮通信使との唱和集を中心に資料調査を行った。18 世紀初頭の朝鮮通信使と日本文人との間の漢詩文による交流の実態を研究することがその目的であった。具体的な資料名は次のとおりである。①『林家筆語』(享保 4 年) 1 冊、②『桑韓唱和塤篪集』(享保 5 年) 3 冊、③『両関唱和集』(享保 5 年) 2 冊、④『和韓唱和集』(享保 6 年) 2 冊、⑤『鶏林唱和集』(写本) 1 冊、⑥『両東唱和録』(正徳 2 年序) 2 冊。合山は、1 月 23 日、金沢市立玉川図書館において、正徳度の朝鮮通信使との接見が確認できる儒者伊藤莘野の詩集『瓊敷玉藻』、及び、同館所蔵の朝鮮通信使関連文献『桑韓唱和塤篪集』『萍遇録』などを閲覧し、必要に応じて撮影を行った。

個別史料調査の詳細については章を立てていないため、「研究成果報告

書」の記載をもとに、ここで詳述したが、以上のうち康が国立国会図書館において行った調査の成果の一部は、第4章「『朝鮮践好沿革志』（写本、国立国会図書館蔵）に関して」のとおりである。（伊川）

1、対馬現地調査

本研究における最初の活動は、9月19～22日にかけての対馬における共同踏査である。(1) 対馬中近世史に関する史跡情報の共有、整理、(2) 関係研究者とのネットワーク構築、(3) 文献調査の3点を目的に、19～20日は厳原の、21～22日は上対馬の調査を行った。この調査の幹事は小野が担当し、合山、康、伊川が参加した。以下、時系列に沿って調査内容を紹介するが、紙幅の都合上、観光地としての知名度が高いものについては詳細を省略している。

初日である19日には西山寺、対馬歴史民俗資料館（展示見学）のほか、漂民屋、防火壁、中村地区の石塀、長寿院、国分寺を踏査した。西山寺は、永正9年（1512）に宗貞国夫人の菩提寺となって以来、この寺号を名乗りはじめるが、享保17年（1732）以降に近世の日朝関係史に重要な役割を果たした以酊庵が置かれた場所で、同庵開山景轍玄蘇（けいてつげんそ）のものと伝えられる墓石が存在する。長寿院には雨森芳洲の墓があり、国分寺は近世後期に朝鮮通信使の客館が設置された寺である。

20日は対馬歴史民俗資料館における正徳度朝鮮通信使関係の史料調査（記録類II- 朝鮮関係 -A 通信使 -17, 18, 20）のほか、金石城跡、万松院、雨森芳洲住居跡、八幡宮神社、お船江、対州窯跡を踏査した。金石城では、平成4年から8年間にかけての発掘調査の結果、全貌があきらかとなった名勝の庭園が公開されている。雨森芳洲住居跡は国道382号沿いに、表示板のみが遺跡の存在を示している。八幡宮神社には、小西行長の長女であり、宗義智に嫁いだマリアを祀る、今宮・若宮神社が存在する。資料館に

おける史料調査に際しては山口華代氏のご高配をいただき、また、お船江の踏査は俵寛司氏の調査団に同行させていただいた。また、割烹「志まもと」において対馬島志刊行委員会有志（永留久恵、阿比留徳生、永留史彦、小島武博各氏）との交流の機会をいただいた（写真）。

21 ～ 22 日の上対馬調査は、案内役をお引受けいただいた永留史彦氏より、同氏なくしては成立しなかったと言っても過言ではない多大なるご協力をいただいた。21 日は大船越、小船越、梅林寺跡、烏帽子岳展望台、和多都美神社、仁位宗氏中村館跡伝承地、海神神社、峰町歴史民俗資料館、天神多久頭魂神社、佐須奈、鰐浦を踏査した。小船越は、上対馬と下対馬をつなぐ地峡に位置するのみならず、東西の海をわずか約 100 メートルの陸で隔てていることから、遣唐使の時代から陸路、海路の要衝であり、中世には応永の外寇で占領された。また、現在の JA 対馬・経済センターの地に存在した当時の梅林寺は、対朝鮮通交の許可書である文引の発給を担ったと伝えられる。一時は本宗氏を凌ぐ勢力を持つこともあった、仁位宗氏が南北朝から室町初期にかけて拠った中村館は、現在の長崎県立豊玉高等学校の敷地内にあり、祭祀遺跡が存在する。佐須奈、鰐浦両港は、対朝鮮通交に重要な役割を果たしたが、対馬市立佐須奈診療所の裏に日向番

所の石築地や井戸跡を確認できた。

22日は豊の洲河真紀氏のご高配により、同氏宅において史料調査の機会をいただいたほか、慶龍院、西福寺、長松寺、円通寺を踏査ののち、対馬市教育委員会文化財課を訪れ、また水崎遺跡の踏査を行った。洲河家文書は上対馬町誌編纂委員会編『上対馬町誌　史料編』（上対馬町、2004年）に61件収められているが、未収文書を中心に簡単な調査を実施させていただいた。慶龍院は、三浦の乱で戦死した宗盛弘の子、将盛が府中（厳原）を追われて拠った浜御殿の跡である。その古文書は上述『上対馬町誌　史料編』に収められている。円通寺は、使節として多くの来日経験をもつ李芸が、宗貞茂の死に際して弔問に訪れたと伝えられる[2]ほか、その門前には佐賀三代（宗貞茂、貞盛、成職。1408～68）が拠点とした佐賀の館があり、平成18年などに発掘調査が行われている[3]。水崎遺跡は、一時は宗氏を凌ぐ勢力を保持したとされる早田氏との関連が想定されている遺跡である。対馬市教育委員会文化財課において田中淳也氏のご案内ものもと、水崎遺跡の各国からの輸入陶磁器、瑪瑙製石帯などの出土物を見学したのち、小島武博氏の同行のもと現地を確認した。同遺跡は、近年学界内外の関心が高まっている遺跡であるが、平成11年発行の報告書[4]によると、とりわけ全出土陶磁器のうち、貿易陶磁が占める割合が97％にのぼると指摘されている点は、交流史の観点から特筆に値しよう。（伊川）

2、李学逵（イ・ハッキュ）「草梁倭館詞」の世界

近世日朝交流史研究は、倭館貿易と朝鮮通信使に集中し、日朝交易の衰退期や倭館が周辺の地域社会に及ぼした影響については検討が進んでいない。それには史料的限界もある。対馬藩が残した膨大な貿易外交記録に比べ、釜山側に残った記録はきわめて少ないからである。筆者は、漢文学から19世紀の倭館周辺の民衆的文化交流に接近した金聲振（キム・ソンジン）（釜山大学）

の一連の論文[5]によって、朝鮮末期の文人、洛下生・李学逵（1770～1835）の存在を知った。また文学を地域史資料として読むという問題提起に刺激を受けた。本共同研究では、金の論文に導かれつつ、あらためて作品を一首ごとに読解し、その歴史資料としての可能性を探究した。

李学逵は、実学の大家、李瀷（イ・イク）の家門で生まれ育った。朝鮮実学最大の思想家であり科学者である丁若鏞（チョン・ヤギョン）は兄弟子であり姻戚であった。南人と呼ばれた彼らは、老論派官僚の腐敗政治を批判、社会改革の具体的提案を掲げ、西学を吸収して技術や科学など様々な分野の学者を輩出して政治の世界に進出していた。李学逵も若くして奎章閣に入り『奎章全韻』などを校訂した。しかし、南人の最大の庇護者であった正祖が崩御すると、1801年、老論が邪学排斥を名目に天主教信者が多かった南人を大量粛清した（辛酉邪獄）。処刑は100人以上、流刑は300人以上に上り、李学逵もこの政治弾圧に連累して慶尚道・金海に追放された。

金海は洛東江の下流に位置し物流の中心地として発展した豊かな地方都市であった。倭館のある釜山浦と近く、富裕層を中心に日本の文物が浸透していた。逆賊として流配された李学逵だが、ソウルから来た知識人は歓迎された。やがて慶尚道の広い地域から文人や地方官が李学逵を訪問するようになり、それにつれ李学逵の行動範囲も広がった。李学逵は丁若鏞の現実主義を反映した文学論に深く共鳴し、自ら見聞した民衆の生活相を活写する詩を多く残した。

「草梁倭館詞」は七言絶句体の詩篇20首からなる連作詩である。前掲論文において、金聲振は1811年の朝鮮通信使が対馬易地聘礼へ出航した前後に、李学逵は釜山浦を訪れたと推測している[6]。我々は、さらに李学逵が朝鮮通信使出航後に実際に倭館を訪れたのではないかと考える。詩には、倭館の内部構造や開市の様子が具体的に描かれ、日本語や対馬方言も記述されており、また、開市や接慰使の帰る時の倭館の宴の様子も記述されて

いるからである。当時、民間人が倭館に入ることは禁止されていたが、不正に入館証を受け、或いは門将にワイロを渡して倭館に入ることが横行していた。李学逵が倭館に入った可能性は十分考えうる。

「草梁倭館詞」は文学的側面からだけではなく、歴史研究の観点から見ても興味深い資料である。例えば、倭館の外観を詠う第一首の「碧瓦　流る」とあるが、同時代の薩摩藩士の書いた朝鮮漂流日記[7]の絵、倭館修理についての先行研究[8]、申維翰（シン・ユハン）の『海游録』など朝鮮通信使の日本行録などを参照すると、青味を帯びた瓦屋根が並ぶ倭館が釜山周辺地域の特異な風景であったこと、当時の瓦が倭館内で焼かれた瓦である可能性があること、家舎規制のある朝鮮に対して、瓦屋根が続く風景が日本を象徴する風景として意識されていたことなどが理解できた。また、倭館の開市風景を詠った第七首の「萬牛の鞹（かわ）」についても、牛皮をめぐる日朝の社会状況を背景とする。日韓の先行研究[9]や朝鮮王朝実録など[10]から、対馬藩が雪駄生産に対応して牛皮の輸入を始め、1811年当時すでに毎年数万枚を輸入していたこと、一方、朝鮮では牛食と飲酒が流行し、風俗紊乱や深刻な農村荒廃を引き起こしていたため牛の屠殺禁止令がたびたび出されていたが、義州商人・東莱商人が全国的な牛皮の集荷を展開しこれに地方官吏の関与したことなどが明らかである。李学逵には支配層の腐敗を風刺する詩も多い。「草梁倭館詞」は倭人の世界を主題とした紀俗詩であるが、その視線の背後には、常に朝鮮の社会が意識されている。

「草梁倭館詞」に歴史学的に接近を試みた成果は、より深化させたうえで後日改めてまとめたい。（小野）

3、「草梁倭館詞」の可能性―漢文学研究の側から―

本共同研究では、全5回の検討会を開催し、その中で、19世紀前半の実学者李学逵の「草梁倭館詞」（『洛下生集』冊九）について討議した。

先章で小野が詳述するように、本作品は、19世紀初頭の倭館を詠詩対象としたものであり、当時の倭館の状況を知るための重要な資料である。ただ、議論を重ねるうち、「草梁倭館詞」は、朝鮮における日本についての情報の蓄積という側面も持っており、朝鮮における日本表象という観点からも興味深い研究対象であることが明らかとなった。

たとえば、朝鮮通信使からの日本に関する情報を、李学逵が摂取していたことが分かる表現が存在する。本作品の一部の詩篇は、倭館ではなく、富士山や琵琶湖、天皇の住居など、日本そのものを詠っているが、その中でも、第18首の「二十四橋香橘裏／家家紅袖倚欄秋（二十四橋　香橘の裏／家家の紅袖　欄に倚るの秋）」（転結句）という表現は、享保4年（1719）の朝鮮通信使の製述官申維翰による「日東竹枝詞」（『青泉集』巻二、第8首、転結句）の「二十四橋紅橘裏／家家珠箔鎖名姫（二十四橋　紅橘の裏／家家の珠箔は　名姫を鎖す）」という詩句から発想を得ていることが明らかである。

また、清代中国の文献に由来する外国の知識を李学逵が摂取し、それが、「草梁倭館詞」中の詩句に利用されていることも判明した。具体的には、第1首転結句の「一自皇霊斃木下／戍倭強半住萊州（一たび皇霊の木下を斃せしより／戍倭の強半は萊州に住む）」中の「木下」という表現がそれに当たる。この「木下」は、豊臣秀吉を表し、それは、清・尤侗の「外国竹枝」の日本を詠った詩の中の語句「空傳歴代吾妻鏡／大閣終歸木下人（空しく歴代を吾妻鏡に伝ふれど／大閣は　終に木下人に帰す」（第1首目、転結句）や、信長が、樹下に寝ている秀吉と出会い、家来とした上で「木下人」と名付けたという、『明史』外国伝中の記述[11]に拠っていると考えられるのである。

李学逵と関係の深かった実学者丁若鏞などを含め、李学逵周辺での日本関係の情報流通の様態を明らかにすること、その上で、李学逵の日本観を

分析することが、今後の課題となるだろう。

なお、李学逵の漢詩の検討は、日本漢詩の研究においても意味があるように思われる。たとえば、近世後期の日本においては、竹枝詞が大流行し、遊郭や地方の温泉街、港町に到るまで、様々な地域の風景や習俗がこの詩体によって詠われているが、これらの作品群の特徴などを考える際、「草梁倭館詞」をはじめとする李学逵の紀俗詩は、一つの有効な比較対象となるであろう。これまで、日本漢詩は、中国の作品や詩風との関係の中で評価されることが多かったが、新たに朝鮮の作品と比較することで、その性質がより明確になると考えられる。（合山）

4、『朝鮮践好沿革志』（写本、国立国会図書館蔵）に関して

筆者は、共同研究の一環として国立国会図書館所蔵の通信使関係資料および歴史・風俗など朝鮮事情をおさめた本を調査した。その中に『朝鮮践好沿革志』（写本）があるが、同書は、近世日本における朝鮮一般に関する認識の如何を調べる上で参考になる好資料である。同書は、朝鮮の歴史・風習・対日本外交・対中国外交などの情報をまとめたものであり、多数の朝鮮本が参照されている。『国書総目録』にも同書が立項されており、「二巻一冊　㊟外交　㊟雨森俊良（芳洲）　㊟国会」とあるとおり、雨森芳洲（1668 ～ 1755）をその著者としている。

ところで、筆者の調査結果、同書の筆者は芳洲ではないと判断されたので、ここにその点を指摘したい。国文学研究資料館ホームページにある日本古典籍総合目録においても、同書の著者は芳洲となっており、国会図書館の NDL-OPAC にも同じく明記されているので、『国書総目録』の内容が修正された痕跡はない。それでは、『国書総目録』以下の情報は、なぜ芳洲を著者としているのだろうか。同書の最終丁には、「以上　正月二三日　宗對馬守内　雨森東五郎」とある。考えるに、この箇所から雨森東、

つまり芳洲が著者であると判断されたのだろう。

しかし、それより７丁前には「雨芳洲の書に云」とあり、そこから最終丁まで一つ書きがつづく。つまり、そこから最終丁までは、芳洲の本の引用であり、「以上～雨森東五郎」は引用元資料の著者名を記したものであり、『朝鮮践好沿革志』の著者を表したものではないのである。芳洲が自身の本を引用しながら「雨芳洲の書に云」と書くとは考えにくいので、芳洲は著者ではないと考えるのが穏当であろう。

ほかにも、芳洲の著作ではないと考えられる証拠がいくつか確認できる。同書の第二丁目表には朝鮮の領土の大きさに関して「東西二千里南北四千里。本邦の里程にて東西八九十里、南北三百里程ともいへり」とあるが、これは、『続三十輻』所収の「隣交始末物語解」（芳洲著）の内容と相違する。「隣交始末物語解」には、「彼國の路程、南北二千三百餘里、東西千里餘。彼國の里數を以ていへり、彼國の十里は日本の一里に當ると云」とある。

また、『朝鮮践好沿革志』には二種の朝鮮地図が載っており、その一つは「三國通覧」、もう一つは「懲毖録」からの引用であることが明記されている（三丁表）。「三國通覧」とは『三国通覧図説』のことで、林子平の手による三国（朝鮮・琉球・蝦夷）の地図と解説書である。『三国通覧図説』は奥付から天明５年（1785）に脱稿されたことが分かるので、宝暦５年（1755）に没した芳洲がこの地図を参照することは不可能であり、よって『朝鮮践好沿革志』が芳洲の著作でないことを裏付ける[12)]。

以上、『国書総目録』の情報とは違って、『朝鮮践好沿革志』の著者が芳洲でないことを指摘した。同書には、多数の朝鮮本が参照されており、近世に朝鮮本が流布している状況をうかがわせる点においても興味深い。そのことに着目して同書に対するさらなる検討が必要であると考える。（康）

おわりに

本研究の成果は以上のとおりであるが、第1章における対馬での現地情報の共有ならびに、研究者間のネットワーク構築や、第4章における個別資料調査による『朝鮮践好沿革志』に関する新たな知見の獲得とならんで、第2～3章にかけてみた李学逵「草梁倭館詞」が、近世日朝交流の現場である草梁倭館および日本を具体的に描き出しているとの認識を共有できた点は、大きな成果と位置づけることができよう。「草梁倭館詞」ならびにその周辺事情については小野が従来より抱いていた関心を、研究グループで共有し、合山を中心に輪読会で検討を進めてきたものである。この詩ならびに筆者李学逵については、第2章記載のとおり、金聲振氏の一連の研究があるが、各篇の詳細な解釈や詩作の意義については、なお考究する余地がある。本研究においても、全体像の把握に重点をおいて活動をしてきたが、充分な成果として取りまとめるには至らなかった。この点を解決すべく、合山を代表者として「朝鮮漢文学と中近世の日本」と題する計画を、平成23年度文学研究科共同研究に応募し採択された。同研究は、平成22年度のメンバーに加え、金聲振氏のほか学内外各位のご理解を賜り、総勢10名の研究組織を擁するにいたった。平成22年度に蒔いた種が、平成23年度に開花し、来年度以降さらなる果実を結ぶことにより、近い将来、本学が当該領域の研究拠点としての役割を果たすことを祈念するものである。（伊川）

注

1）研究成果報告書は同室サイト（http://www.let.osaka-u.ac.jp/ken-sui/6_PARTNERSHIP/jointresearch_22_02b.pdf）で公開されている。

2）李芸が貞茂の賻祭に訪れたことは、『太宗実録』18年4月甲辰条、『世宗実録』即位年9月己酉条にみえる。

3）報告書として長崎県対馬市教育委員会『佐賀の館跡』2006 年がある。

4）長崎県美津島町教育委員会『水崎遺跡』1999 年、24 頁。このほか同遺跡については、長崎県美津島町文化財保護協会『水崎（仮宿）遺跡』2001 年がある。

5）たとえば「釜山倭館과 韓日間　文化交流」(『韓国文学叢』22, 1998 年)「釜山近隣地域의 生活에 미친 釜山倭館의 영향」(『東洋漢文学研究』12, 1998 年)がある。

6）金聲振は李学逵が通信使の随員に選ばれた知人を送って釜山浦を訪れ、またその後も釜山浦を訪れていたと推測する（註 5、「釜山倭館과 韓日間　文化交流」15 頁、「釜山 隣近地域의 生活에 미친 釜山倭館의 영향」9 頁）

7）神戸大学図書館住田文庫所蔵、安田義方著/高木元敦編『朝鮮漂流日記 1 ～ 7』文政 7 年（1824）。

8）金禮晶「1774 年草梁倭館修理의　日本職人과 道具 및 建築材料에 관한 研究－対馬宗家文書『東館修理記録』과『西館修理記録』를 中心으로」(『韓国民族文化』31, 2008 年)

9）塚田孝『近世身分制と周縁社会』（東京大学出版会、1997 年）、金東哲「19 世紀　牛皮貿易과 東莱商人」(『韓国文化研究』6、1993 年)。

10）たとえば『承政院日記』英祖 51 年（1775）1 月壬子条。『純祖実録』3 年（1803）8 月辛未条など。

11）該当箇所の原文は以下の通り。「日本故有王、其下稱關白者最尊、時以山城州渠信長為之。偶出獵、遇一人臥樹下、驚起衝突、執而詰之。自言為平秀吉、薩摩州人之奴、雄健蹻捷、有口辯。信長悅之、令牧馬、名曰木下人（日本には故(もと)より王有り。其(そ)の下(した)に関白(かんぱく)と称する者ありて最も尊し。時に山城の州の渠(かしら)信長を以て、之と為す。偶(たまた)ま出猟し、一人の樹下に臥(ふ)すものに遇ふ。驚起して衝突す。執(とら)へて之を詰(なじ)れば、自ら言ふ、平秀吉、薩摩州の人の奴(ど)為りと。雄健蹻捷(ゆうけんきょうしょう)にして、口弁有り。信長、之を悦(よろこ)びて、馬を牧(ぼく)せしめ、名づけて木下人(ぼっかじん)と曰(い)ふ。）」なお、訓読は、藤堂明保、竹田晃、影山輝國『倭国伝―中国正史に描かれた日本』（学習研究社、1985 年）を参考にした。

12）この点については岸田文隆氏のご教示をえた。

伊川健二（文学研究科招聘准教授）
合山林太郎（文学研究科講師）
小野潤子（大学院修士課程学生）
康盛国（大学院博士後期課程学生）

요지

문학연구과 공동연구
“中近世　日朝交流史의 학제적인 연구”　활동 보고

이가와겐지, 오노준코, 고야마린타로, 강성국

본 보고서는 2010년도 문학연구과 공동연구지원을 받아, 이가와겐지・오노준코（이상, 共生文明論）와 고야마린타로・강성국（이상, 日本文学), 이렇게 4명이 中近世日朝交流에 관한 사항을 조사, 연구한 성과를 보고하는 것이다. 각 장의 개요는 이하와 같다.

‘1. 쓰시마 현지답사’（이가와）는 2010년 9월19일부터 22일에 걸쳐 실시한 쓰시마 현지답사에 대해 보고한다. ‘2. 이학규〈초량왜관사（草梁倭館詞)〉의 세계’（오노）는 이학규《낙하생고（洛下生藁)》의 윤독연구회를 통해 가장 중점을 두고 논의한〈초량왜관사〉에 대해 보고한다. ‘3. 〈초량왜관사〉의 가능성 －한문학 연구 측면에서’（고야마）는〈초량왜관사〉를 통해서, 일본에 관한 정보가 조선문인들에게 어떻게 축적되어 있는지 그 양상을 살핀다. 또한 이학규한시 연구의 의미와 가능성을 제시한다. ‘4.《조선천호연혁지（朝鮮践好沿革志)》（사본, 일본국립국회도서관 소장）에 관해서’（강성국）는, 공동연구의 일환으로 조사한 조선 관계자료 중, 종래 아메노모리호슈（雨森芳洲）의 저작으로 알려져 있는 《조선천호연혁지》가 아메노모리호슈의 저작이 아니라는 것을 발견한 바 이를 보고한다.

본 연구는 2011년도에도 문학연구과의 공동연구지원을 받게 되어, 부산대학교 인문대학　김성진 교수를 포함해 멤버들을 확충하고 “조선 문학과 중근세 일본” 이라는 보다 발전적인 주제로 공동연구를 지속하기로 하였다.

この韓国語要旨は小野および康により作成された。